

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

大学生をどう育てるか 教養体育からの発信

期日 2014年11月29日(土) 15:30~17:30

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス
体育研究所 (スポーツ棟2F会議室)



シンポジストならびにテーマ

- 上智大学必修科目
《ウエルネスと身体》のめざすもの
師岡文男 (上智大学)
- 大学体育の論と証拠と満足度
木内敦詞 (筑波大学)
- 体育が育てる大学生—マンマ—の
伝統スポーツ「チンロン」を教材として—
田寰健太郎 (流通経済大学・大体連関東支部長)
- 活力ある塾生の育成
石手 靖 (慶應義塾大学体育研究所所長)

ディスカッサント

関根 謙 (慶應義塾大学文学部長)

コーディネーター

村山光義 (慶應義塾大学)



問い合わせ先

慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1 慶應義塾大学体育研究所

TEL: 045-566-1068 E-mail: murayama@z3.keio.jp (担当: 村山)

URL: <http://ipe.hc.keio.ac.jp/>



公益社団法人
全国大学体育連合

趣旨

昨年刊行された、岩波書店の「シリーズ 大学」の第5巻「教育する大学——何が求められているのか」の中で、吉見俊哉氏は「現在日本の大学は、大学の量的拡大と少子化、グローバル化の加速的進行、知識の複雑化と流動化という課題への対応を迫られる三重苦の状態にある」と述べている。すなわち、少子化と大学数増加によるユニバーサル化した大学運営は、かつてのエリート養成機関から多様化し、生き残りをかけている。また、「世界で最も勉強しない」といわれる大学生をグローバル化が押し寄せる社会にどのように送り出すのか、各大学はその具体策を示し、実践することが急務となっている。そしてそこには、21世紀の複雑化社会において、大学における知の変容にも対応するという課題が同時に存在している。

この現状に対して「大学の質保証」が求められ、大学はアドミッション・カリキュラム・ディプロマポリシーを掲げ、その認証を受けながら、大学の機能を果たすことになっている。しかし、しばしばこのプロセスはトップダウン的であり、学生の育成を担う現場と十分に連携できているか、その理念の達成に機能的なシステムができていないか、検討し続ける必要がある。慶應義塾大学体育研究所では、こうした現状を踏まえ、将来の大学体育を見据えた課題研究（基盤研究プロジェクト）に継続的に取り組むこととした。本シンポジウムはこの基盤研究の1課題である「大学体育の教育理念とカリキュラムを考える」を基幹としている。また、(公社)全国大学体育連合関東支部においても、このような時代の大学教養体育のあり方について特に授業研究を題材に検討しており、大学間での議論を深めるためにも、共催シンポジウムとして企画することとなった。

大学生をどう育てるか？ このテーマは1教科目に留まるものではない。しかし、我々教養体育の現場は、何より座学と異なる教員と学生の双方向作用を特徴に持ち、かつ「身体」を通じた実体験を享受させている。こうした体育の教育性を再考し、学生の育成について考えることは、大学体育の理念と意義を今ふたたび示すとともに、大学教育の充実に貢献することにつながるはずである。シンポジストには上智大学・師岡文男氏、筑波大学・木内敦詞氏、流通経済大学・田養健太郎氏（大体連関東支部長）、慶應義塾大学・石手靖氏（体育研究所所長）を迎え、各大学における多彩な取り組みを紹介いただく。詳細は以下の発表概要を参照いただきたい。また、ディスカッションには慶應義塾大学文学部長・関根謙氏を迎え、体育分野以外から大学教育全体を見据えた評価を頂きながら、総合的な議論を行いたいと考えている。

大学の主役は学び育っていく学生である。「大学生をどう育てるか」。我々の大きな使命感で今この課題に立ち向かう必要がある。

コーディネーター 慶應義塾大学体育研究所 村山光義

上智大学全学共通必修科目「ウェルネスと身体」のめざすもの

— 保健体育 2 つの授業目標の達成に向けて —

上智大学保健体育研究室 師岡文男

1. 上智大学の教育理念

- 財団法人 上智学院の寄付行為の条文（設立目的）1911年4月6日

「青年男子ヲ教育シ其智力上道徳上社交上及体力上ノ幸福ヲ増進スルニ在リ」

- 上智大学創設者イエズス会教育使徒職国際委員会（編）、高祖敏明（訳）

『イエズス会の教育の特徴』中央出版社、26頁、1988年

「全人教育とは、身体的発達に教育の過程の他の側面とよく調和していることをも意味する。そのため、イエズス会の教育は、スポーツや体育についてのよく開発された教育課程を含む。スポーツの教育課程は、身体を鍛えるばかりでなく、男女の若人が成功と失敗の両方を、寛大に受容する多くの機会をも提供する。また、彼らは、グループ全体のより大きな利益に貢献するために、各自の最も優れた資質を活用して、他の人と協力して、働く必要に気づくようになる。」

- 現在の上智大学の教育理念

Men and Women for Others, with Others の育成

2. 日本学術会議の提言

- 「21世紀の教養と教養教育」2010.4.5

「大学教育における体育・健康教育は、高校までのような多面的・包括的な教育課程によって制約されるものではないが、心身の健康維持や選択した種目の活動を通じての技量形成・仲間づくりに加えて、保健体育の意義、身体の理（ことわり）と自然や生活様式などとの関係についての理解を深めるという点でも重要である。さらに言えば、この教育・学習活動は、芸術関連の活動とともに、非言語的な（nonverbal）表現能力・コミュニケーション能力の形成という点でも重要である。学問知が主に言語を媒介にして事物・事象の本質を捉え思考し表現するのに対して、保健体育や芸術はそれらを含みつつ、情念・情意や感性と言われるものをはじめ、知性に収まりきらない人間性の深所を抉り出し、それを表出・表現する活動である。体育や芸術の活動における自己表出・自己表現の作用は自己発見や自己との出会いの契機として、また、体育・スポーツにおける集団活動や芸術鑑賞は他者との共感・連帯・対話の契機として、豊かな人間性・市民性を培うという点でも重要であろう。さらには、日常生活においても、表情・身振りや振る舞い方などの非言語的要素が対話や人間関係や集団的活動の場を豊かにすることも言うまでもない。そうした多様な意義を持つものとして、保健体育科目を豊かなものにしていくことも重要である。」

・「現代における学士課程の教養教育について（４）芸術や体育の持つ意義」2010.7.22

「教育は、頭（知育）と体（体育）と心（徳育）の三つをバランスよく育てることであるという点は、プラトン以来どの教育論でも述べられてきている。しかしながら、日本の大学は知育を偏重し、申し訳程度の体育を行い、徳育を司る芸術や宗教に関しては殆ど手をつけてこなかった。現在も、圧倒的に言語あるいは論理に偏った教育（知育）であることに無自覚なままであるが、これは人間の発達過程において著しくバランスを欠く行為であり、自立した市民を生み出すという大学の機能からすれば、危機的な状況とさえ言える。」

3. 上智大学全学共通必修科目「ウエルネスと身体」

(1) 2つの目標

「ウエルネス（全人的健康—身体的・精神的・社会的に良好な状態）」と
「身体の知（身体についての気づき・知識・知恵）」の理論学習と体験学習

(2) 4つの学習内容

<実 習>

身体のレッスン： 自分をひらき、自分で感じながら自分の身体を再発見したり、メディアとしての身体に気づき、身体を使った非言語コミュニケーションの機能や重要性を体験する

フィットネス： 科学的な測定を行うことで自分の体組成や体力を知り、データをどう解釈するかを学ぶとともに、個人で生涯持続可能な健康・体力の維持向上のためのトレーニング方法を体験する

<講 義>

健康のリテラシー： 運動・食生活・ストレスについて、巷の俗説に惑わされない正しい知識や考え方を身につけるとともに、自分のライフスタイルにどう取り入れていくかを考える

スポーツと身体： 身体の文化性・歴史性、身体文化としてのスポーツ、スポーツのメディア性や政治性などについて学び、議論することによって幅広い身体観・スポーツ観を身につけ、身体やスポーツのもつ機能や価値をより良く活かしていくことを考えていく

4. 必修である必要性

- ・ 受講後の無記名アンケートで 90%以上の学生が「必修賛成」と回答。
- ・ 「必修でなければ絶対に履修していなかったが、これからの人生に必要な知識と体験を得ることができた。今後も必修であり続けるべき」とその理由を書く学生が多い事実
- ・ 人間らしさを失わないために必要なアナログ文化である身体活動を体験学習する機会

大学体育の論と証拠と満足度

筑波大学体育系 木内敦詞

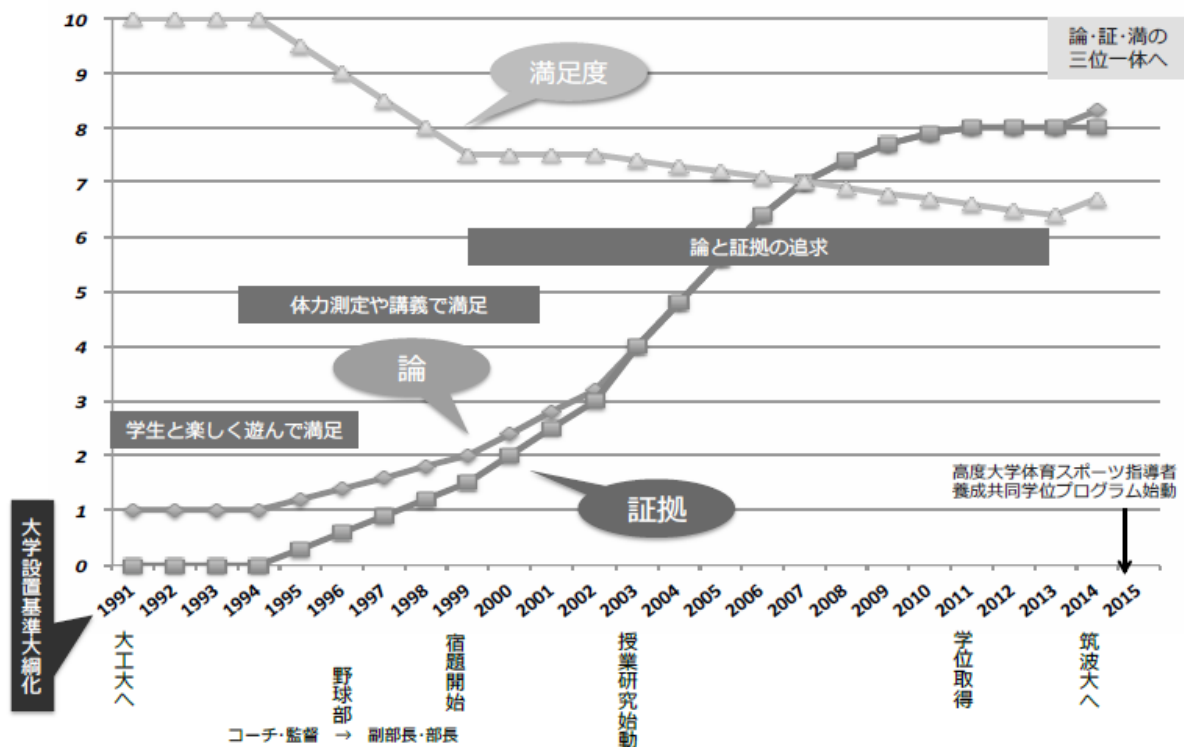


図1. 大学体育に関する「私の論と証拠の自己評価と、受講学生の満足度」曲線

- 【授業評価＝授業成果か？】 授業評価アンケートは受講者の「反応（満足度）」に過ぎず、「学習（理解度）」「行動（活用度）」「結果（影響度）」を十分に評価していない。
- 【論＜証拠 → 論&証拠】「技術、知識、態度」育成がシラバスに書いた餅であることがある。たとえ満点に近い授業評価や技能上達という事実が生まれたとしても、それは大学教育としての体育の存在意義＜論＞や教育効果＜証拠＞を示したことにはならない。
- 【論&証拠 → 論&証拠&満足度】 知識や態度についての学習成果についての学術的証拠を揃えることに挑戦し、健康教育としての大学体育の論と証拠に関するいくつかの成果を得た。しかし、学生による体育授業の効用認知は「健康づくり＜友達づくり」。→社会的スキルを内包するライフスキル教育としての大学体育授業の論と証拠の獲得に挑戦中。慶應大グループがより先進的に取り組んでいる。
- 【教える内容 → 教える方法】 そのシラバスや教材を他の教員にも採用してもらったところ、明確な効果は得られず（分析中）。→教える内容・教材だけではなく、教え方の問題か？→ インストラクショナル・デザイン (ID) の導入。
- 【三位一体への指針】 ID とは、教育の効果・効率・魅力を高める技術と科学の総和。論と証拠と満足度の三位一体なる大学体育への成長へ向けた1つの方略。
- 【大学体育教員の養成・高度化】 筑波大学と鹿屋体育大学は、高度大学体育スポーツ指導者養成共同学位プログラム（3年制博士課程）を来年度より始動させる。体育スポーツ現場の教育と研究の循環を効果的に行える、高等教育における学術的職業人としての体育教員の養成・高度化を図り、大学体育教育の質保証を先導できる人材育成をめざす。

体育が育てる大学生

ーミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」を教材として

流通経済大学スポーツ健康科学部 田蓑健太郎

I. 伝統スポーツを導入する背景

これまで大学教育におけるスポーツ教材は、高等学校までの指導要領に示されている種目を中心に展開されることがほとんどであった。

流通経済大学でも同様である。さらに、教員養成も行っていることから、実技科目として開講している種目は全部で17科目あるが、ほぼ競技スポーツ（近代スポーツ）である。

しかし、少子化の現在、絶えず「自分」を中心に考える思考方法が定着している学生に対し、自分以外の他人をサポート（別言すれば、「競わないで協力する」）する重要性を経験する機会を「授業」で提示することが「いま」の学生にとって不可欠だと思われる。

そうした中、私が担当する「ニュー・スポーツ実習」においてミャンマーの伝統スポーツである「チンロン」を教材として導入することにした。

「チンロン」には、本学の学生が持つ以下の特徴に対し、応えることができると判断したからである。

- ①専門学部といっても、入学試験で実技を実施していないから実技レベルは決して高くない学生が入学している。
- ②幅広いスポーツを経験することによって、よい深くスポーツを理解する。
- ③留学する学生が少なくなった現在において、世界に興味・関心を示すきっかけを作る。
- ④誰もが「初めて」経験するスポーツのため、学生の実技レベルに差がない。
- ⑤「チンロン」は「協力」しなければ成立しない。

II. 授業の実際

まず、ウォーミングアップの後、「チンロン」は「型」を重視しているため、6種類の型の練習を行う。その後、2人組で10～20回を目標に蹴り、4人組に増やし、同様に蹴る。

最終的に6人組で輪をつくり蹴るが、ここでも30回程度を目標におくことによって、協力関係が生まれる。

しかし、チンロンの醍醐味は何と言っても「技」にあることから、1コマごとに技を身につける時間を確保し、技の修得のための練習も途中で入れる。

6人組のうち3人ずつ入れ替えて、新しいチームを作り、練習することもオプションとして考えられる。

III. 伝統スポーツで学生を育てる

上記の理由で導入した伝統スポーツであるが、「チンロン」が協力を前提に成立しているため、ややもすると、実技を行うのが面倒くさいという学生も積極的に参加しなければいけない状況が生まれた。その結果として、1コマ（90分）の授業でしっかりと運動量を確保できたとともに、学生同士のコミュニケーションもとることができた。

授業を通して、学生同士の協力関係を構築することができた上に、簡単な単語とは言え、ミャンマー語を使うことでミャンマーに興味・関心を持った学生が多少なりとも出てきたことは、教材として単に目新しいだけでなく、伝統スポーツを通して、世界を少しでも感じるきっかけ作りができたといえよう。

活力ある塾生の育成

慶應義塾大学体育研究所 石手 靖

慶應義塾大学体育研究所では「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」と基本方針を打ち出し、体育・スポーツ分野の教育プログラムを展開し、塾生の心身に「感動」と「興奮」を与え、塾風を涵養することを目標に取り組んでいる。この体育研究所の姿勢をより多くの塾生に知ってもらうために「当世塾生気質」と題したリーフレットを作成し、この2年間新入学生を中心に配布した。その結果、他の要因との相互作用もあり体育科目の履修者数は増加傾向となった。

展開している教育プログラムの一つは、キャンパスに体育・スポーツ実践の場を作り、運動を習慣化し身近なものにするためのプログラムで、授業場面に限ったものではない。もう一つの教育プログラムとは「身体」をキーワードに人間を理解するためのプログラムであり、体育研究所の研究活動を土台として広く身体運動の文化までも探る科学的アプローチである。この二つの教育プログラムは、常に慶應義塾の伝統と精神を基礎に塾風を涵養することを意識して実践している。

最近開催したスポーツイベントを二つ紹介する。一つは、今年10月に開催した「KEIO フットサルアドベンチャー2014」、二つ目は、今月8日から16日まで約1週間開催した「KEIO CHALLENGER INTERNATIONAL TENNIS TOURNAMENT 2014」である。両イベント共に塾生が自ら作り上げることを基本とし、塾生自身が大会を企画運営している。後輩のために良き伝統を残すということを実感し、スポーツを通じて多方面にわたる多くの方々との交流機会を得ることができる。また、自分達の通う大学キャンパスで開催するという点、参加者、学生スタッフ、教職員が一体となってイベントの成功に向けて取り組むことが愛塾心を育成すると考えている。

慶應義塾には、その会長に代々の塾長が就く体育会という組織がある。現在多くの大学でスポーツ関連の部（クラブ）活動を統括する組織の名称として体育会という言葉が使われており、慶應義塾もその例外ではない。大学を代表して競技に参加する言わばアスリート集団を指し、世間ではその学生を体育会系学生と表現したりもする。しかしながら慶應義塾における体育会の当初のあり方は現在のそれとは異なっていたと考えられる。その発足は明治25年、全塾生の健全なる身体の発育をめざして設けられた。初代会長は福澤捨次郎。福澤諭吉の二男である。はじめは①剣術②柔術③野球④端艇⑤弓術⑥操練（兵式体操）⑦徒歩の7部を置き、塾生達は幾部でも所属でき学問の合間をみて運動に励んだとされる。また全塾生が体育会費を納め（この体育会費については現在でも体育会部所属の学生は納めている。）運動の機会を得ていたのである。当時の会則によればその目的を「本塾学生に完全なる身体の発育を得さしむるを以て目的とす」と示されている。現行の会則では以下のように改められている。「スポーツにいそしみ義塾の発展に寄与しようとする塾生が、先輩塾員の協力のもとに、技をみがき、体位の向上をはかるとともに、品性を陶冶し、学生スポーツの本旨を全うするため協同すること」とある。

要するに体育会とはある特定の学生集団を指すのではなく、学生において人格形成あるいは学問の習得のためには運動が必要不可欠なものであるという基本的な考え方のもとに設けられたと考えられる。

近年、無感動・無関心といわれる現在の若者がメールやスマートフォンに依存し、人間味あるコミュニケーションが不足する時代において、最も必要とされる教育こそ「人とつながれる教育」「人と語れる教育」「人を思いやれる教育」であり、我々が担う役割は体育を通じた豊かな人間形成である。

大学において国際社会で活躍できる人材の育成が期待されている中、主体性と積極性、チャレンジ精神、協調性と柔軟性をバランスよく備えた人材の育成に努めたいものである。

シンポジスト・ディスカッサント(プロフィール)

シンポジスト

師岡文男（もろおかふみお） 1954年東京都生まれ。1976年上智大学文学部史学科卒、1979年筑波大学大学院体育研究科修了後、上智大学文学部へ。1986-87年イリノイ大学客員講師を経て、2000年より教授。初代全学共通教育委員会副委員長、委員を6年務めた。1980年から体育実技科目「フライングディスク」を開講。日本フライングディスク協会（JFDA）・世界フライングディスク連盟に携わり2度の世界選手権大会招致(1992・2012年)、2001年World Games秋田大会招致（フライングディスク種目アルティメットとディスクゴルフを正式種目化）に成功。現在JFDA会長。その他、国際キャンプ会議事務局長、国際スポーツ団体総連合理事、日本オリンピック・アカデミー理事、（公社）全国大学体育連合理事、など32団体の役員を歴任。現在も国際ワールドゲームズ協会、日本レクリエーション協会、日本ウエルネス学会など多くの団体の理事を務める。2007年文部科学大臣「生涯スポーツ功労者表彰」受賞。2012年（公社）全国大学体育連合「大学体育教育賞」受賞。

木内敦詞（きうちあつし） 1966年大阪府生まれ奈良県育ち。1989年筑波大学体育専門学群卒、1991年筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了。大阪工業大学助手・講師・准教授を経て、2014年3月より筑波大学体育系教授。博士（教育学）。日本体力医学会評議員、（公社）全国大学体育連合大学体育学編集委員。専門は大学体育論で、多数の研究論文がある。現在、筑波大学・鹿屋体育大学の共同プログラムである「高度大学体育スポーツ指導者養成大学院共同学位プログラム」のスタッフとして、新時代の大学体育を拓く指導者養成システムの構築にも取り組んでいる。

田箕健太郎（たみのけんたろう） 1972年兵庫県生まれ。1995年日本体育大学体育学部卒、1997年日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了。日本体育大学、国土舘大学大学院スポーツ・システム研究科を経て、2005年より流通経済大学スポーツ健康科学部へ。2013年より教授。陸上競技部顧問。日本体育学会スポーツ人類学専門分科会・日本スポーツ人類学会に所属しスポーツ史、スポーツ人類学を専門とする一方、公益財団法人 龍ヶ崎市まちづくり・文化財団理事のほか龍ヶ崎市のスポーツ振興・健康推進活動をリードしている。また、2013年より（公社）全国大学体育連合理事・同関東支部長として大学体育の活性化にも尽力している。

石手 靖（いしでやすし） 1961年東京都生まれ。1984年慶應義塾大学商学部卒、同年慶應義塾大学体育研究所へ。1990年順天堂大学大学院修士課程体育学研究科修了。1997-98年UCLAへ留学、同Volley Ball TeamのアシスタントコーチとしてNCAA優勝に貢献。その後、慶應義塾体育会副理事、慶應義塾大学学生総合センター副部長などを経て2013年より体育研究所所長。日本バレーボール学会理事・横浜ビーチバレーボール連盟理事。バレーボールの研究教育の他、数多くのスポーツイベントやシンポジウムの企画を実現。近年はブラインドサッカーの普及などにも取り組む。

ディスカッサント

関根 謙（せきねけん） 1951年福島県生まれ。1978年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。埼玉県で公立高校教諭を務めたのちに、中国の西安外国語学院で日本語教育に従事、帰国後北陸大学外国語学部助教授、慶應義塾大学文学部助教授などを経て、2010年より慶應義塾大学文学部長。専門は中国現代文学。翻訳書に『飢餓の娘』など。